

患者による痛みの表現に着目した痛みの質問票の評価

佐藤 心平

痛みを診断する際、患者に「憎悪・緩和因子」「性質」「場所」「強さ」「時間」の PQRST に沿って聞くことが望ましいとされている。これらは痛みの質問票に組み込まれていると考えられる。しかし痛みは主観的であり、患者によって痛みのとらえ方も表現も異なるため、質問票に記載された質問と回答方法が、患者が訴えたい痛みと対応しているとは限らない。

本研究は、痛みの質問票の現状と問題点を明らかにすることを目的とし、痛みの質問票の質問内容と回答方法を調査した。

はじめに、医中誌 web を検索して痛みの質問票について書かれた論文を検索により収集した。検索された 76 件（2016 年 11 月 14 日検索）の論文から、痛みの質問票が掲載された論文を選択し、18 件を得た。18 件の論文から、日本語で書かれた痛みの質問票を 20 本収集し、調査対象とした。質問票の調査項目は、PQRST を参考にして、「強さ」「場所」「時間」「憎悪・緩和因子」「性質」の 5 つを設定した。設定した調査項目に基づいて、痛みの質問票の内容を調査した。

質問票を調査した結果、「強さ」には「言葉」「数字」「VAS」「顔の表情」を選択する回答方法が認められた。「場所」には「人体図」に印、表面または内部の「言葉」を選択、「自由記述」を用いる回答方法が確認された。「時間」には「一番痛む時間」については自由記述、「持続時間」については言葉を選択する回答方法が使用されていた。「持続時間」の選択肢には、「短期的」のように痛みの長さを表すもの、「リズムック」のように痛みの調子を表す選択肢が認められた。「憎悪・緩和因子」には、「じっとしていても強くなる」「和らぐときはいつ」の質問に対し、言葉の選択や自由記述による回答方法が使用されていた。「増悪・緩和因子」についての質問は、腰痛やがんのような、持続する痛みに関係する質問票に認められた。「性質」には、「侵害受容性疼痛」と「神経障害性疼痛」を具体的に表す言葉を選択する回答方法が使用されていた。「強さ」「場所」「時間」「憎悪・緩和因子」「性質」の 5 つの項目に入らない質問は「その他」にまとめたが、「日常生活への影響」「精神への影響」「身体感覚」があり、回答方法は言葉や数字の選択、VAS、自由記述が使用されていた。

本研究の結果に基づくと、痛みの質問票において、「強さ」は、「数字」「VAS」「顔の表情」の客観的な指標による回答方法に加えて「日常生活への影響」の言葉を組み合わせる、「時間」のうち「痛み始めた時期」「一番痛む時間」「痛みの生じ方」については言葉を選択する回答方法と、「持続時間」については「痛みの長さ」と「痛みの調子」を分けた回答方法を使用する、「性質」は、「侵害受容性疼痛」と「神経障害性疼痛」の言葉を「疼痛」の項目にまとめ、「疼痛」と「身体感覚」の言葉を選択する回答方法を使用することにより、患者は的確な回答ができるようになると考えられる。

(指導教員 岩澤まり子)